

学友かわら版



国際ロータリー第 2770 地区 学友会発行
第 10 号 令和 3 年 2 月 20 日

目次

1. 巻頭言 ロータリーがめざす「機会を生みだす」取り組みの歯車として
～コロナ禍における新たな学友会の交流と連携～
学友会会長 服部純一 1
2. 2019-20 年度財団奨学生帰国報告
 - ・ コロナウィルス流行下のイギリスに留学して 江田慶子 2
 - ・ 留学生として過ごしたパリのロックダウン 山田茉委 4
3. 特別寄稿
 - ・ アジア開発銀行の新型肺炎に係る支援について～モルジブの事例～中根誠人 ... 6
 - ・ COVID-19 の流行と世界の医療現場から～アメリカ合衆国の場合～ 成田瑞 8
4. 2020-21 年度奨学生現地報告
 - ・ オーストリア・グラーツでの音楽 宮崎紗織 9
5. 2021-22 年奨学生紹介
 - ・ 対話を生み出す展示の工夫 梅谷彩香 11
 - ・ 発達障害児の脳神経生理を研究することの意味 上田理誉 13
6. 特別寄稿 田中徳兵衛・徳尚グローバル補助金の奨学金基金について
..... 田中徳兵衛パストガバナー 15
7. Zoom 実施の 2020 年度学友会総会・学友知的交流のつどい・編集後記 16

巻頭言

ロータリーがめざす「機会を生みだす」取り組みの歯車として
～コロナ禍における新たな学友会の交流と連携～

RI2770 地区 学友会長 服部純一

2020-21 年度の国際ロータリー会長ホルガー・クナーク氏は、「奉仕の行いは、その大小にかかわらず、助けを必要とする人たちのために機会を生みだすものである」として、「ロータリーは機会の扉を開く」を年度テーマに掲げました。私たち学友も、留学の機械をいただいた時期や分野はそれぞれ異なりますが、グローバルな視点で自分の研究分野での勉学を進めるとともに、ロータリーの国際的な奉仕の輪に関わるきかいと、国際的な人のご縁をいただきました。

昨年 2 月からの国内外の新型コロナウイルスの流行は、緊急事態宣言の発令を含め、私たちの生活を大きく変える影響を与えています。



2019—20 年度の奨学生として留学されていた江田慶子さんも山田茉委さんも、研究生生活後半の3月で帰国せざるを得ない状況になりました。留学先でのコロナ禍の研究生生活については、お二人から報告をいただいています。健康面ではご無事に帰国できたことは良かったものの、1年間の研究計画の中での途中帰国せざるを得なかったことは残念でした。

当地区の学友会も、例年9月の第一土曜日に行ってきました総会・学友知的交流のつどいも、一堂に会することもできず、11月21日にZoomによるオンライン開催を余儀なくされました。でも、オンラインはそれなりのメリットもありました。例えば、遠方にお住いのために総会においでいただけなかった学友に参加いただけたりと、現在海外でご活躍中のが急にもライブでご参加いただけたりと、各地でのコロナ流行の状況や、それぞれの専門分野からの対策のポイント、国際協力の上でのニーズなどをご報告いただきました。その概要は本号の特集記事として掲載してありますので、楽しみにご覧下さい。

私は何よりも、学友会の存在のありがたさを感じたのは、マスコミで報じられる状況報告ではなく、その生活している人の目線や、専門家としての視点での分析を伺うことができたことです。また、コロナ禍だからこそスピード感を持って、経済支援や医療での人々への奉仕を、学友会のメンバーも役割の一部を果たしているということも、ロータリーが助けを必要とする人たちのために機会を生み出すものであるという「ロータリーは機会の扉を開く」を体現していると感じた次第です。

「コロナの影響でできない」のではなく、このような混乱した時代だからこそ、私たち学友がそれぞれの専門分野で、社会のニーズに応えていける部分を見つけ、積極的に奉仕の機会を見つけて、積極的に働きかけていきたいと思います。そして、新たな交流の機会として学友会のオンラインでの企画も含め、皆さんの力をお貸ししたいと思います。

2019-20 年度財団奨学生帰国報告 1

コロナウィルス流行下のイギリスに留学して

江田慶子（浦和北ロータリークラブ推薦 グローバル補助金奨学生）

イーストアングリア大学大学院（イギリス）国際開発学専攻

2019-20 年度財団奨学生の江田慶子です。浦和北ロータリークラブの推薦で、イギリスのイーストアングリア大学で勉強しました。2020 年の9月に出発しまして、残念ながらコロナの影響で3月末には日本に帰国しておりましたが、その後もオンラインで日本から授業を受講しておりました。

私が学んでおりましたのは、国際開発学部といいまして、アジアやアフリカなどの発展途上国の貧困問題をどのように解決できるかを政治学的・社会的・経済学的などから考える学問です。イーストアングリア大学はロンドンからバスで2時間程かかる田舎町です。国際開発学において世界でも有名な学校でもあり、同じ学部内に30人程の日本人が在籍しています。また、作家のカズオ・イシグロが卒業した大学としても有名です。大学にはたくさん



の留学生がいて国際色豊かです。大学内に、24時間運営の図書館、銀行、スーパーマーケット、ジムなどなんでもそろっているのも、大学内の寮に住んでいる私は、1週間大学内から出ないこともあるくらい、とても便利で、勉強に適しています。大学内の広大な敷地内は緑豊かで、なんと湖まであります。近所に住んでいる方々にとっては定番の散歩コースになっているようで、犬を連れた人たちも多くいます。大学内の寮で13人のルームメイトと住んでいました。インド、中国、ベトナム、アメリカ、カナダ、エチオピア、ナイジェリア、レバノン、日本、と国際色豊かです。トイレ・キッチン・シャワールームが共有なので、共有スペースの使い方について寮の中で小さな喧嘩も発生しますが、それはそれで楽しんでいます。文化の違いで衝突することはあっても、皆私よりも若く優秀でとてもいい子たちばかりです。毎日会っているうちに、寮の仲間たちが家族のようにほっとできる存在になりました。

大学は思っていた以上に休みが多くあります。特にクリスマスとイースターは1か月の休暇があります。ただ、遊びすぎていると休暇あけの課題提出に間に合わなくなるので油断は禁物です。1週間の授業数もあまり多くありませんが、授業の前に読んでこなければならぬ文献が膨大です。授業のない時間はほとんど文献購読に充てていました。修士論文



ではシアバター生産が農村女性の経済的・社会的エンパワーメントに与える影響について執筆し、人生で一番勉強した時間となりました。大変なことも多いですが、それよりも勉強する喜びは大きいです。特に、ブルキナファソの現場でもやもやと感じていたことが、セオリイとして紹介されている時や、これまで知らなかった問題解決のための政策や手法をどのように今後ブルキナファソで応用できるのかと考えている時はとてもワクワクします。

環境問題への大学側の主体的な取り組みも、日本の大学とは大きく違うところでした。最初のオリエンテーションでは、学生ができる様々な取り組みが紹介されました。バスなどを使わずに自転車に乗ること、スーパーではなく地元の農家から野菜を買うこと、新しい服ではなく古着を着ること、フェアトレードラベルのついた商品を買うこと、牛を育てる過程では、大量のCO2が排出されるため、牛肉の消費を控えることなどが説明されました。実際にまわりには、ベジタリアンであったり、私は牛肉だけは食べない！という人も多く、私自身、そのような生活に密着した環境への取り組みに、非常に影響を受けました。

マイノリティーへの配慮も驚いた点です。大学構内にはイスラム教徒のためのお祈りの場所が用意されていたり、ジェンダーニュートラルトイレといって、男女誰でも入れるトイレもあります。LGBT、障がい者、留学生向けのサポートも手厚く、同じ悩みを持った人が集まる大学主催のイベントも多くあります。私が特にいいなと思ったのは、自分の性別の申告です。日本の一般的なアンケートなどでは、女性か男性かの欄しかありませんが、こちらのほとんどのアンケートでは、自分の性をどのように認識しているか？という質問で、女性、男性以外にも、Transsexual（いわゆる性同一性障害の人）Gender Questioning（自身の性に関して未確認の人）などたくさんの項目があります。こういった多様性を理解する動きが日本の大学でもできてくれるといいなと思いました。

9月から独立行政法人国際協力機構（JICA）という、国のODA（政府開発援助）と呼ばれる、途上国への支援を実施する機関に就職することができました。特に、アフリカ諸国の産業振興・ビジネス促進などを担当しています。シアバターとは一見関係のないように見えますが、「加工」をし「付加価値」のある商品輸出を促進するにはどうすればいいのか？という視点は多くのプロジェクトに関係しており、非常に役に立っています。

このように、1年間何の不安もなく留学し、勉強させて頂き、希望通りのところに就職できましたのも、浦和北ロータリークラブ、2770 地区国際ロータリー財団、現地のイギリスのロータリークラブの皆さまのおかげで素晴らしい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

2019-20 年度財団奨学生帰国報告 2

留学生として過ごしたパリのロックダウン

山田茉委（さいたま櫛 RC 推薦・地区補助金奨学生）
ソルボンヌ大学大学院（フランス）美術史専攻

2019年9月から、国際ロータリー第2770地区の財団奨学生としてフランスのパリへ留学に行っていました。本来は2020年6月まで滞在予定だったところ、新型コロナウイルスの世界的大流行によって3月末に途中帰国となってしまいましたが、この危機的状況の中で、留学生として多くのことを考えさせられました。そうした点も含めて、本日は帰国報告をさせていただきたいと思います。

私の留学先は、パリにあるソルボンヌ大学（旧パリ第4大学）というところです。私が専門にしているのは美術の歴史を学ぶ「美術史」と呼ばれる学問で、そのため今回の留学では、世界的な美術史研究の権威であるソルボンヌ大学の文学部美術史・考古学専攻に学籍を置き、著名な教授陣による多彩な講義に日々参加しました。古代から現代に至るまで、美術の歴史を包括的に、かつ丁寧に説いてくださる先生方のおかげで、私自身これまで興味のなかった様々な画家に関心が向き、知見を深めることができましたと感じます。授業で学んだ作品をすぐに美術館で鑑賞できるのも、パリ留学のすばらしい経験のひとつでした。また、私はパブロ・ピカソらと同時代に活躍したフランス人画家マリー・ローランサンについて研究を行なっているのですが、大学での授業と並行して、現地の図書館や美術館で画家にまつわる資料の調査活動も行うことができました。こうした調査で得られた成果は、今後の研究で論文などの形を通して発表していきたいと考えています。



（中庭から見たソルボンヌ大学）



（ピカソ美術館で）

「芸術の都」とも称されるパリの街には、美術館や文化施設が密集しており、とりわけ美術史を勉強する私にとってこのうえない学びの場所となりました。空き時間を見つけては美術館へ通い、貴重な作品の姿を目に焼き付けた日々は、決して忘れることのない思い出であり、今後の研究生生活においても大きな糧となると確信しています。自分にとって初めての長期留学でしたが、パリの街の開放的な空気や、陽気な人々、優しい友人たちに助けられ、一生のうちに一度でもこうしてパリに留学できたという喜びを噛み締めながら、日々を過ごすことができました。今後チャンスがあれば是非またパリで勉強や研究をしたいと考えています。

しかし憧れの留学生活も残り 3 ヶ月ほどとなった 2020 年 3 月頃、私自身も新型コロナウイルスの影を生活の中で感じるようになりました。実はフランスでは 2019 年末から 2020 年頭にかけて、戦後史上最長を記録した大規模なゼネラルストライキが起こっていたため、ようやく電車やバスが動き出したことにほっとしていたところでした。新型コロナウイルスの流行が報じられた当初は、私も友人たちもどこか悠長（スーパーマーケットに並ぶ人々）に構えていましたが、瞬く間にイタリアをはじめヨーロッパ全域に感染が広がり、3 月中旬には大学も休校措置がとられました。大統領がロックダウン（都市封鎖）を宣言する前から様々なリーク情報が飛び交い、人々は慌てて買い溜めに走らざるを得なくなり、私も近くのスーパーマーケットで最低限の食料を必死に買い集めました。どの店の前にも客の長い列が伸び、商品棚は空っぽになり、街全体が不安や恐怖に包まれていた様子を今もよく覚えています。ついにロックダウンが施行されると、外を出歩くのに許可証の携行が義務づけられ、普段ほとんどマスクを着けないフランス人がマスクやバンダナで口元を覆って静かに街を歩くようになりました。そしてニュースでは各国の留学生を取り巻く厳しい状況が日々伝えられ、私の住んでいた学生寮でも帰国を決める友人が徐々に増えていき、いよいよ自分の身に危機が迫っていることを痛感しました。

寮の自室で一人孤独な時間を過ごす中で、このままとどまるか帰国するかを選択を迫られ、私自身大変に悩み、辛い時間を経験しました。実際は安全を優先し即帰国すべき状況にありながらも、長い時間をかけてようやく勝ち取った留学の機会を何としても手離したくない、という大きな葛藤を抱えていました。また、これまで人の命と何かを天秤にかけて考えたことが無く、どうすれば冷静な判断を下せるのか自分でも段々と分からなくなっていました。しかしそうした時、私の研究している画家ローランサンの恋人で、「ミラボー橋」で知られるギョーム・アポリネールという詩人がいますが、彼が 1918 年頃から大流行したいわゆる「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザに罹患し、若くして亡くなったことを思い出しました。ローランサンとアポリネールは結婚こそしていませんでしたが、当時ローランサンは愛する人の早すぎる死を大変嘆き、生まれることのなかった二人の娘の姿を作品に描いたのでした。後に自身が亡くなるときには、バラの花とともにアポリネールからのラブレターを胸に抱いた姿でベッドに横たえられたと伝えられます。それからおよそ 100 年後の時代を生きる私が、同じようにウイルスによるパンデミックを経験することになると



は夢にも思っていませんでしたが、歴史を学ぶ者の一人としても、過去の悲しみから何か学習しなければならないと感じ、これが命を守るため帰国を決めるきっかけのひとつとなりました。学問というものが、人生の中で思いがけない形となって自分を導く存在となることを感じる出来事でした。帰国を決意してからは、日本の家族や友人、またロータリーの方々からも連日のように励ましのメッセージをいただき、最後の日まで無事に過ごすことができました。また帰国後も、ロータリーのあたたかい支援によってオンライン授業という形で学びを継続でき、危機的状況の中でも充実した時間を過ごしました。

思えば、留学出発時には台風のため空港に一晩缶詰になり、到着後も大規模ストライキが起き、帰国を前にパンデミックが発生するという、なかなか波乱続きの留學生活でした。大変なことも多かったとはいえ、しかしその分学び考えさせられることがたくさんありました。歴史の証人になったつもりで、この経験を忘れず今後も過ごしていきたいと思います。そしていつか、私自身がそうだったように、自分の経験が未来の誰かの力になることを願って、自分の仕事や役割をまっとうできる存在になりたいと今は考えています。

特別寄稿 1

アジア開発銀行の新型コロナウイルスに係る支援について ～モルジブの事例～

アジア開発銀行 中根誠人 （岩槻東ロータリークラブ推薦）
2004-5 年コーネル大学留学（アメリカ合衆国）応用経済学専攻

私は、2004 年に一年間ロータリー財団から親善奨学生として支援をいただき、アメリカ合衆国のコーネル大学で応用経済学の勉強をしました。その後も同大学で勉学を続け、2009 年に博士号を取得後、いくつかの国際機関を経て、現在、アジア開発銀行（ADB）のマニラ本部でシニアエコノミストとして勤務しております。



出典：Google

ADB では、新型肺炎、COVID-19 の流行の影響を受けたアジアの開発途上国に対し、2020 年の初頭から様々な支援を行っています。私はモルジブのオペレーションを担当しているため、モルジブを例に ADB の COVID-19 に関してどのような支援を行ってきたのか紹介させていただきます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、モルジブはインド洋の南に浮かぶおよそ 1,200 の島々からなる島嶼国です。人口は約 50 万人で、観光業、及び漁業を主な生業としています。

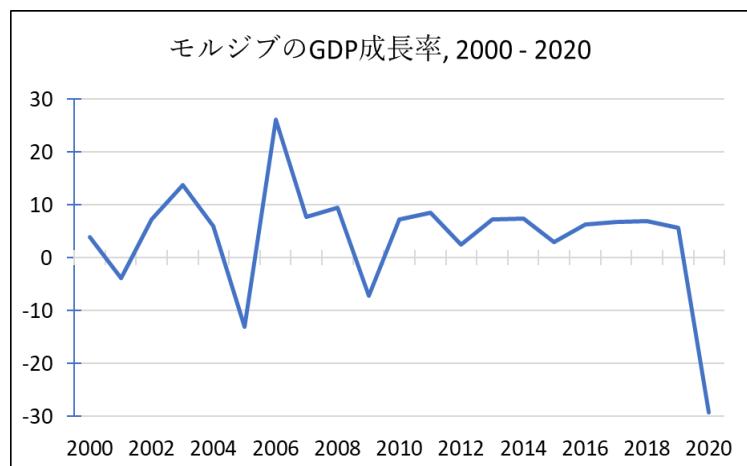
COVID-19 の感染が世界で広まりだした当初、モルジブでは感染は見られなかったのですが、3 月から観光客や外国人労働者を通じて同国内にも COVID-19 が広がり初めました。感染者数の増加を受け、モルジブは非常事態宣言を発令しました。このような事態を受け、ADB でも感染症対策に必要な医療器具を購入するための無償資金を 2.3 億円供与することにしました。しかし、各国が一斉に同じ器具の購入に走った結果、医療機器の国際市場がひっ迫し、資金を供与しただけではモルジブ政府は必要な機材を購入することが出来なくなってしまいました。そのため、医療機器の調達の分野でノウハウを持っている国連機関、UNICEF 及び UNOPS と連携し、資金提供のみならず、購入調達のサポートも行いました。



出典：アジア開発銀行

また、モルジブ政府は 3 月下旬から空港を閉鎖し、海外からの入国を禁止したため、観光業が壊滅的な打撃を受け、経済の成長率が大きく落ち込んでしまいました。政府は光熱費の軽減や失業者への所得補填、中小企業に対する特別融資など、経済支援対策を打ち出したものの、歳入の多くを観光に頼っているため、財政状況も急速に悪化してしまいました。これを受け、ADB は JICA とともに約 100 億円の特別財政支援を行い、政府の経済対策をサポートしました。

現在、モルジブでは新規感染者数は落ち着いていますが、観光業がまだ回復していないため、経済的に厳しい状況が続いています。そこで、ADB では、引き続き政府と連絡を取りながら追加の財政支援を検討しています。また、政府は観光業を全面的に再開し、外国からの観光客を受け入れるにあたり、国内のワクチンの接種も実施する予定しており、ADB では他の国際機関と共にワクチン調達の支援も検討しています。微力ながらも、引き続き ADB を通じ、アジア各国が COVID-19 のダメージから早く回復できるよう尽力してまいります。



出典：アジア開発銀行

(原稿は 2020 年 12 月現在の寄稿です)

COVID-19 の流行と世界の医療現場から ～アメリカ合衆国の場合～

スタンフォード大学医学部精神科 成田瑞（幸手ロータリークラブ推薦）

2018-19 年ジョンズホプキンス大大学院（アメリカ合衆国）精神医学専攻

2018 年奨学生成田瑞です。2018 年 8 月より財団のご支援を賜りジョンズホプキンス公衆衛生大学院に留学させて頂きました。この場をお借りして皆様方のご支援に改めまして深謝致します。本年よりスタンフォード大学医学部精神科に異動しまして、うつ病を中心とした疾患の新規治療を研究しております。

ここでは、COVID-19 下のアメリカの変化と現状について触れさせていただきます。アメリカでは 2020 年 1 月頃からアジアでの症例が少しずつニュースになる程度で、この時点では対岸の火事でした。2 月の時点ではトランプ大統領が” The deadly coronavirus would “miraculously” disappear by April（致死的なコロナウイルスは 4 月には奇跡的に消えてなくなる）” と発言するなど、国家として危機感が無い状態でした。状況が変わったのは 3 月で、私が当時住んでいたメリーランド州の時系列を以下にまとめます。

3 月 3 日：スーパーチューズデー（大統領候補の予備選挙）で盛り上がり。COVID-19 関連のニュースは少ない。

3 月 5 日：州で初の感染報告。その日に州知事が緊急事態宣言。

3 月 11 日：ジョンズホプキンス大学が対面の授業中止。20 人以上のカンファレンスや勉強会が中止。

3 月 13 日：大統領による「国家非常事態宣言」から、欧米への航空便の凍結。

3 月 16 日：州内の飲食店、映画館、およびジムの閉鎖。トイレットペーパーの買い占め。

3 月 18 日：学内の共同研究施設がすべて閉鎖。テレワークに移行する勧告。

3 月 23 日：州知事が非基幹ビジネスの閉鎖を指示。

ご覧の通り、3 月 3 日のスーパーチューズデーから一転、緊急事態宣言や大学における対面の授業中止までが非常にスピーディーに行われました。特に 3 月 16 日は、お昼過ぎに州知事が飲食店、映画館、ジムの閉鎖命令を出し、その日のうちに実際に全てが閉じました。日本では緊急事態宣言が出るまで時間がかかったり、マスクがなかなか届かないなどという状況を聞いていたので、この辺りは政治システムに大きな違いがあると感じました。

このように一部の州ではスピーディーな対応が取られたにも関わらず、アメリカ国民の意識はバラバラという感じでした。例えばハーバード大学があるマサチューセッツ州のような地域では人々がいち早くマスクをするようになった一方で、フロリダ州では大規模なビーチパーティーが行われていました。良く言えば多様なかもしれませんが、国民が一人丸となって感染を抑え込んでいるアジア諸国と比べるとコントロールが難しい状態でした。トランプ大統領も 2020 年 7 月まで公共の場でマスクをつけていませんでした（これは戦略的にやっていたものと考えられています）。

その後アメリカがどうなったのは皆さんのご存知の通りです。この原稿を書いている12月初旬の時点で、1日の感染者は20万人超、これまでの死者が29万人を超えました。間違いなく世界最高の医「学」レベルを誇る国で、こ



のような医「療」の結果になってしまったことは個人的にも大変残念なことでした。

私自身は現在スタンフォード大学のあるカリフォルニア州に移り住みましたが、相変わらず状況は悪く22時から5時までの外出を禁止する curfew (門限) が施行されています。スタンフォード内でのレギュレーションも厳しいもので、大学に来るスタッフの数を制限する、患者さんと接する際は写真のようなフル装備が義務づけられるなどとても息苦しい状況は続いています。



さて、この原稿を書いている時点で大阪の病床使用率が70%を超えたというニュースが日本から入ってきました。このような状況下で日本の患者さんに直接貢献できないことを申し訳なく思うと同時に、自分ができる形で患者さんの利益になるような仕事（アメリカからだとい

日本の患者さんには間接的な貢献になってしまいますが）をしていこうと考えています。どうぞマスク、手洗い、三密回避、体調が悪ければ休むなどの基本にご留意されて頂けたら幸甚です。遠方からではございますが皆さんのご健康をお祈り申し上げます。

(原稿は2020年12月現在の寄稿です)

2020-21 年度奨学生現地報告

オーストリア・グラーツでの音楽

グラーツ国立音楽大学大学院 宮崎紗織 (大宮ロータリークラブ推薦)

2020-21 年グラーツ国立音楽大学大学院 (オーストリア) ピアノ専攻

2020年9月よりオーストリアのグラーツにあるグラーツ国立音楽大学に留学しピアノを学んでおります、宮崎紗織と申します。東京芸術大学を卒業後、子供の頃からの夢であったヨーロッパへの留学が叶いました。グラーツの街に降り立った瞬間から、日本と全く異なる音楽の都の風を感じ、現地の価値観や言葉に触れ、刺激的な時間を過ごしています。豊かな色彩感ある音色を出すために、また現地で自ずと受ける様々なインスピレーションを形にするべく、毎日の練習に励んでいます。主科で師事する池場文美教授は現在グラーツ国立音

楽大学のピアノ科主任としてご活躍されており、日本人ピアニストの音楽的問題点、改善すべき点を素晴らしい先生のご演奏を通してご指導していただきます。

先生のお言葉をいただくと魔法がかかったかのように自分の演奏が変わり、終了後は高揚感、幸福感に包まれる特別な感覚が生まれます。それは今迄日本の

学びの中では感じる事が出来なかった理想の姿であると言えます。また、学部生時代に引き続き私が最も学びたいと思っていた声楽の伴奏の勉強に取り組んでいます。私はドイツ歌曲の世界に強く惹かれており、現地で、ドイツ語で、学ぶレッスンは私にとって非常に貴重で大切な時間です。



オーストリアは日本と比べて国全体の人口が多くなく、第二の都市であるグラーツも人口約 30 万人の小さな街ですが、世界遺産にも登録されている旧市街は本当に美しい街並みです。旧市街にはオペラハウスや楽友協会のホールがあり音楽施設も充実しています。しかしながら昨今のコロナ禍、演奏会は中止され音楽に包まれていたオーストリア全体から音が止み、大学ではレッスンや合奏、室内楽が行われなくなり、音楽

界においても極めて大きな打撃を受けました。

私は 2020 年 2 月に合格後 4 月にグラーツへ渡る予定でしたが、実際に渡航が実現したのは 9 月下旬となりました。3 月中頃からのオーストリアのロックダウンに伴い、政府は入国制限を強化しました。渡航予定のビザを持たない外国人に影響があった政策は、在東京オーストリア大使館のビザ申請窓口閉鎖、通常時日本のパスポートに付帯するオーストリア国内に 6 ヶ月滞在できる観光ビザが無効になり入国にはビザの所持が必須になったことです。これらにより渡航が不可能である状況が続きましたが、5 月ごろから流行は徐々に収まりオーストリアは日常の生活を取り戻しました。在東京オーストリア大使館の窓口も 7 月から再開、私も 10 月の冬学期開始に合わせてビザの申請手続を始め 9 月に渡航することができたのです。

しかし冬が近づくにつれ状況は再度悪化し、感染者数は少しずつ増加して行く傾向にありました。それを受け 11 月 2 日から緩いロックダウンの政策として先ずレストランが閉まりました。それでも感染者の増加は食い止めることができず、11 月 17 日から 3 週間制限が強化され、学校、生活必需品以外の店舗が閉鎖となり、街全体の緊張感が高まりました。一旦、12 月 7 日にロックダウンは解除となりましたが、一部対面で行われていた大学のレッスンも全てオンラインに切り替わっており、現在私の大学には入構することができません。

オーストリアは日本を遥かに上回るダメージを受けています。しかし人と人の繋がりを大切にする国民性を持ちながら、厳しいコロナ禍のなかでも強く生き、乗り越えようとする人々の意思を感じられます。そういった風土が引き継がれる中で生まれた、クラシック音楽の本場であるオーストリアへの留学が叶ったことへの幸せを感じざるを得ません。

家で多くの時間を過ごす中、常に交流を絶やさずにいるくれる寮のルームメイトたちの存在に救われています。大切な存在です。留学の醍醐味である他国の人との交流はコロナ禍により、より深いものとなりお互いの母国の料理紹介、共同キッチンでの談笑等他愛ないひと時から人の優しさを実感しています。

この状況は世界中の人々にとって大きな痛手であることは間違いありません。しかし、私



は人々の心を癒すことのできる音楽の力を信じ、いただいた留学の機会を大切に参ります。また、自分のすべきことを時に慎重に、時に大胆に見極めて行動し、音楽家として一つでも多くの学びを得て成長して行きたいです。

最後になりましたが、大宮ロータリークラブの皆様をはじめとしたロータリアンの皆様、また学友会の皆様の暖かいご支援、ご指導に心より感謝申し上げます。

2021-22 年奨学生紹介 1

対話を生み出す展示の工夫

東京大学大学院 梅谷彩香 (浦和ダイヤモンドRC 推薦)

2021-22 年度奨学生 レスター大学(イギリス)博物館学専攻

9月から英国のレスター大学の博物館学研究科修士課程で1年間学ぶ予定にしております、梅谷彩香と申します。私は本来2020-21年度派遣の財団奨学生でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて入学を1年延期し、2021-22年度派遣財団奨学生として資格を認めて頂きました。支援の継続をご決断くださった、浦和ダイヤモンドロータリークラブをはじめとする2770地区のロータリアンの皆様、学友会の皆様に改めて感謝申し上げます。私の学問的関心は主に二つあります。一つは20世紀初頭のロシア文化における絵画と文学の関連で、東京大学大学院総合文化研究科修士課程での現在の研究テーマにしています。もう一つが、留学で専攻する予定の博物館学(museum studies)で、特に博物館における展示の問題に関心があります。今回寄稿の機会を頂いたので、博物館の展示に関して対話という観点から書いてみたいと思います。なお、本稿では「博物館」という語を英語のmuseumに相当する、美術館なども含めた広い概念として用います。

博物館は対話の場である、ということが近年盛んに言われています。4年に一度行われる国際博物館会議（ICOM）の大会が昨年京都で開かれ、学生の私も世界各地の博物館関係者に交じって参加しましたが、そこでも対話という理念を前提として議論がなされていたように感じます。博物館で対話を促進する試みとしては、案内役と来館者が展示を見ながら会話を楽しむ対話型鑑賞や、参加者が共同で作品を創作するワークショップなど、様々なプログラムやイベントが企画されてきました。また、生配信中に視聴者がコメント機能で感想を共有できるニコニコ動画のチャンネル「ニコニコ美術館」の番組を制作するなど、オンラインでの対話に取り組む館もあります。博物館の側が情報を一方的に提供するような従来型の展示解説などと異なり、以上に挙げたような双方向型の企画では、来館者それぞれが主体的かつ自由に作品と向き合う機会が生まれ、他の来館者との交流を通じて多様な見方に触れることができます。

イベントなどの開催を通じてだけでなく、展示そのものを通じて対話を促す工夫に取り組む館もあります。体験型展示やハンズオン展示と呼ばれるものはその代表といえるでしょう。科学館などによく見られるような、装置のボタンを押すことで展示が動く仕掛けや、展示品あるいはそのレプリカに触れて重さや質感を体感するコーナーなどが例に挙げられます。埼玉県立近代美術館の自由に座れる椅子の作品の展示も、こうした取り組みの一環といえます。このような鑑賞体験は、ものとの対話、人との対話を促し、来館者にとって印象に残る貴重な経験となり得るでしょう。

しかし、博物館におけるこのような体験型展示やハンズオン展示の多くは現在、コロナ禍によって中止されています。今の状況下では、触覚に頼らない展示によって対話を生み出す工夫が求められています。最近私が訪れた展覧会の中でその良い例だと感じたのが、六本木にあるサントリー美術館の「日本美術の裏の裏」展（会期：2020年9月30日～11月29日）のやきものの章の展示です。作品は360度から鑑賞できるように展示されており、章のパネルには導入として次のような説明がありました。

やきものには、焼く際に炎が偶然つくり出す多彩な表情があります。それが「景色」です。素地の変色や焦げ、しずくのように流れ落ちる釉などが生み出す景色は、見る方向や角度によって、作品に全く異なる印象を与えます。どの景色がお気に入りか、自分にとっての正面を考えることが、鑑賞ポイントのひとつでもありました。

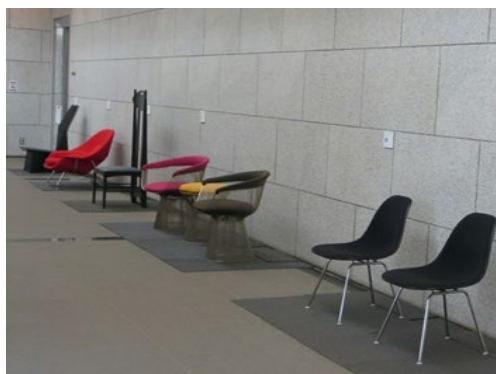
たとえば、当館所蔵の「旅枕花入」では、壁や柱に掛けるための穴の跡がいくつか残っており、歴代の所有者が自分好みの正面を見定めてきた歴史がうかがえます。

本章では、そうした自分だけの景色を探し出す体験をお楽しみください。作品を360度めぐること、「そんな顔もあるんだね」ときっと驚きがあることでしょう。1

普段我々が見たり使ったりするものの多くは、正面がすでに決まっていることが多いと思います。そうしたものの見方に慣れてしまっている私にとって、やきもののどの面を正面にしたいか考えながら鑑賞する仕方は新鮮で、ある定められた一方向のみからただ眺めるのと違い、そのやきものの特徴や味わいと能動的に向き合う経験になりました。来館者の方々は私も含めて皆、展示ケースの周りをぐりと一周、あるいは何周もしながら、やきものとの「対話」を楽しんでいたように見受けられました。

新しい価値観やものの見方と出会える場であることが、博物館の意義だと私は考えています。対話は、こうした新たな価値観やものの見方との出会いの先にあるものといえるでし

よう。展示における重要な観点の一つとして、対話を促す工夫について今後も考えていきたいと思います。



埼玉県立近代美術館の展示風景(2019年7月、梅谷撮影)。現在は展示制限中。



「日本美術の裏の裏」展の展示風景(2020年)。

<文章・画像引用元> (URL はいずれも 2020 年 12 月 15 日閲覧)

注 1: サントリー美術館公式サイト

https://www.suntory.co.jp/sma/exhibition/2020_2/display.html

写真(右): 「読者レポート: リニューアル・オープン記念展 II 日本美術の裏の裏」

インターネットミュージアム、<https://www.museum.or.jp/report/99913>

2021-22 年奨学生紹介 2

発達障害児の脳神経生理を研究することの意味

国立精神神経医療研究センター 上田理誉(川口ロータリークラブ推薦)

2021-22 年田中徳兵衛・徳尚冠名奨学金候補者・小児神経医学専攻

2021—2022 年度奨学生候補に選考いただきました上田理誉と申します。

この度、学友会会報に原稿を寄せる機会をいただき、大変光栄に思っております。

私は鳥取大学医学部を卒業後、小児神経科医となり、主に、発達障害やてんかん、脳性麻痺等、発達過程に何らかの問題を抱えた子どもたち

の診療に携わってまいりました。

中でも外来診療で接する機会が最も多いのは発達障害の子どもです。発達障害には、主に、



社会的コミュニケーションの障害とこだわりや興味のかたよりを主症状とする自閉スペクトラム症、多動や不注意を主症状とする注意欠如多動症、読み・書き・計算など学習上の困難さを主症状とする特異的学習症が含まれます。

私は、このよう障害が疑われる子どもの診断と診断後の子どもたちがご家庭や学校での生活が円滑に送れるようにお手伝いをさせていただいております。発達障害の診断は、決められた診断基準に基づいて行いますが、特に低年齢の子どもの場合は、本人の困り感よりも、ご家族や学校の先生からの子どもの症状に関する訴えが診断の根拠となることが多々あります。このため、発達障害の診断は、子どもの発達障害の症状だけでなく、子どもを取り巻く家庭や学校、地域の影響も受けて、過小診断や過大診断の原因になっています。

私は、発達障害の診断の困難さの原因の一つは、客観的診断方法がないためと考えております。発達障害の原因は脳の機能異常と考えられておりますが、脳波などの神経生理学的手法を用いて、健常（定型発達）の子どもと異なる発達障害児の脳機能を定量することによって、発達障害の正確な診断が可能となるのではないかと研究に興味を持つようになりました。

2017 年からは国立精神神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部で、発達障害やてんかんを持つ子どもの行動異常と脳機能の関連について、脳波や脳画像を用いて研究をしております。

近年、脳画像や脳波を用いた研究分野では、グラフ理論という数学の理論に基づく方法で、領域間の構造・機能連結情報を可視化し、ネットワークの異常として捉えることが可能となってきております。てんかんや発達障害だけでなく、成人の認知症やうつ病などの分野においても、この手法を用いた研究が盛んに行われております。この研究手法では、健常人の脳は、脳が正常に機能するのに効率の良いネットワークを持つ一方で、患者の脳はネットワークの異常を持ち、結果として、病気の症状がもたらされると仮定されています。私自身も、本手法を用いて研究を行っており、積極的に成果を発表させていただく機会を得てまいりました。

注意欠如多動症の子どもの睡眠脳波の浅睡眠の研究では、定型発達児と比べて、脳波の高周波数(γ)帯域の脳の連結性が下がっていることが分かりました。同手法により、感度 90%、特異度 73%で注意欠如多動症の診断が可能であることが明らかになりました。私たちは、この ADHD 患者の睡眠脳波の脳連結性低下が、診断のバイオマーカーとなる可能性があると考え、誌上発表致しました。(Ueda et al. Brain and Development 2020. doi: 10.1016/j.braindev. 2019. 11. 001.) この結果を実際に臨床応用するためには、さらにいくつかのステップが必要ですが、発達障害の客観的診断や症状の重症度の定量的ための第一歩となる可能性があると考えております。

私は 2021 年より、米国ミシガン州デトロイトの Wayne State University で、脳波を用いたてんかんや発達障害の子どもの脳波についての研究を継続する予定です。この研究手法には脳科学の解明をもたらす大きな可能性がある一方で、コンピュータープログラミングや画像・脳波処理技術に高い専門性を要し、この知識や技術の習得に大変苦勞しておりますので、アメリカ留学の機会をいただけることに感謝と喜びで一杯です。

さらには、田中徳兵衛・徳尚グローバル補助金奨学金の候補者として選んでいただき、留学の支援を受けられますことに深く感謝致します。

特別寄稿 3

田中徳兵衛・徳尚グローバル補助金の奨学金基金について



RI 2 7 7 0 地区パストガバナー 田中徳兵衛

この冠名奨学基金は、1985－86年に257地区（現2770地区）ガバナーであった六代目 田中徳兵衛がアジアで初めて作った冠名奨学基金と聞いております。

この基金設立は、私が中学生の時、母のPTA仲間のお子様が自閉症を患っていたことがきっかけでした。今ほど自閉症（自閉スペクトラム症）の理解や治療法も確立されておらず、大変苦労されていたといひます。そこで、父はこの自閉スペクトラム症で苦しむお子さん達を救済すべく、1994年に「ロータリー財団国際親善奨学金」を立ち上げました。父は2005年に亡くなりましたが、その意思を受け継ぎ、「田中徳兵衛・徳尚グローバル補助金の奨学金基金」として更に寄付をし、現在に至ります。

これまでに9名の奨学生をイギリス、アメリカ、オーストラリアの研究施設へ派遣しております。最後に送り出した留学生が2010年なので、10年間活用がされておりました。この事を残念に思い、昨年の6月に埼玉及び東京の自閉スペクトラム症に関する研究機関の学生へ当奨学基金についてお知らせをし、応募を募りましたところ、国立精神神経医療研究センターより上田理誉さんの応募がありました。

中里ガバナー、松本ガバナーエレクト、中川地区ロータリー財団委員長、小宮財団部門委員長と共に面談をし、皆様の了承を得て今年9月からアメリカ・ミシガン州にある「Wayne State University（大学院）」へ2年間留学することになっております。ホストロータリークラブには、デトロイトRCが決定し、現在は地区のオリエンテーションを受けて準備を進めているところです。カウンセラーには、川口RC会員の原田敬美さんというアメリカにフルブライト・プログラムで留学されている大変優秀な方が付いてくれているので、安心しております。

今後も継続して奨学生を送り出し、意義ある事業としていきたいので、留学されたい方はご連絡下さい。一つの小さなきっかけが、多くの方の人生を幸せに導いています。池に投げかけた小石は水に沈みますが、波紋は広く伝わっていく、そのような事業になると良いですね。

2000年以降に田中徳兵衛・徳尚冠名奨学金を受給されて留学された方々

（自閉症療育に関する留学）

派遣年度	奨学生	留学校	留学国
2002 ～ 2003	飯塚直美	英国自閉症協会	イギリス
2005 ～ 2006	東川 健	ノースカロライナ大学	アメリカ
2005 ～ 2006	田中 恭子	ノースカロライナ大学	アメリカ
2007 ～ 2008	植田 みおり	モナッシュ大学	オーストラリア
2009 ～ 2010	川岸 久也	ノースカロライナ大学	アメリカ

Zoomにより実施した 2020 年度学友会総会・学友知的交流のつどい

今年度は 2020 年初めから交際的な大流行となった新型コロナウイルスの流行のため、緊急事態宣言が発令されました。小中高等学校の一時休校や、大学などではオンラインのリモート授業が一般化するなど、移動自粛や大人数での会合の自粛、更にはコンサートや演劇、展覧会まで中止されることが多く、学友会の総会や知的交流のつどいも、一堂に会することが難しい状況になりました。

そこで、例年より 2 か月遅れになりましたが、2020 年 11 月 21 日に Zoom によるオンラインで学友会総会・知的交流のつどいを行いました。水野財団奨学・平和フェロー・学友委員長さんにもご参加いただきました。また、松下衛日本ロータリー学友会長にも、神戸のご自宅からご参加いただきました。

何よりも、ご自宅やお勤め先のパソコンからの参加が可能になったため、岩田託子さん（中京大学）、浅見崇比呂さん（信州大学）、牧由希子さん（NPO 法人）、など遠方やお仕事でなかなかご参加なれなかった学友が参加いただけました。また、フィリピンのアジア開発銀行から中根誠人さんと谷口潔さん、オーストラリアから築瀬史貴さんとアメリカから成田瑞さん、留学中の宮崎紗織さんはオーストリアのグラーツからなど、海外にお住いの学友も参加してくださり、それぞれのお立場からお話を聞く、知的交流ができました。そして、宮崎さんには、勉強中のピアノの演奏をご披露いただきました。

オンラインの機械操作の煩わしさや、直接お話しできないもどかしさはありませんでしたが、世界と同時につながれることや、お住まいやお仕事の関係で、普段なかなか参加しにくい方にもたくさんご参加いただけたのは、価値や意味が大きかったと思います。これからも、オンライン等もうまく組み合わせながら、学友の皆さんと共に連携できる方法を模索していきたいと思います。

編集後記 更につながり、私たちの学びや経験を奉仕に生かそう

日本ロータリー学友会代表幹事の高木さん（神奈川湘南ロータリークラブ）から連絡があり、湘南ロータリー推薦で留学予定の奨学生が、当地区で 1985 年にフランスに留学された上田さんというピアニストで音楽の先生に、留学後の勉学についてコンタクトを取りたいので、連絡先を紹介いただけないかという問い合わせがありました。RI257 地区大先輩の学友でしたが、同じ音楽家の平澤幹事のおかげで、高木さんからの依頼にも応えられ、その方も上田さんとの連絡が無事に取れたそうです。

今回は Zoom による学友会に参加していただいた方々に執筆をお願いしましたが、これからも更に連携し、学友が相互にもロータリーの奉仕ともつながっていければと思った「かわら版 Vol 110」でした。コロナに負けずがんばりましょう。